

日本語の助数詞と中国語の名量詞の対照

—定義と下位分類を中心に—

A Contrastive Study of Numeral Classifiers in Japanese and Chinese: Discussion on Definition and Subcategorization

周 知
ZHOU Zhi

This paper provides a contrastive analysis of numeral classifiers in Japanese and Chinese and clarifies the differences in their possible coverage in the two languages using syntactic and semantic criteria. First, it offers a definition of numeral classifiers in both Japanese and Chinese. Second, it examines the subcategorization of numeral classifiers and compares their coverage in both languages. There are two types of Japanese numeral classifiers: ordinal and quantity. In contrast, Chinese has only ordinal numeral classifiers. Therefore, Japanese numeral classifiers cover a wider range than Chinese classifiers.

キーワード： 助数詞、名量詞、定義、下位分類

Keywords: Numeral classifier, Definition, Subcategorization

1. はじめに

本稿は周知(2022)の内容に基づいて、日本語の助数詞と中国語の名量詞を対照しその相違点を明らかにするものである。

例文(1)(2)が示すように、物を数える場合、英語では物を表す名詞が不定冠詞または数詞の後ろに現れる。例文(3)~(6)が示すように、日本語と中国語の両方において物を数える場合、数詞と物を表す名詞の間にある言語要素が必要である。この要素を日本語では助数詞と呼び、中国語では名量詞と呼ぶ。

(1) A book. 安藤(2005:386)

(2) Three apples. 島山(2016:29)

(3) 一冊の本。 安藤(2005:386)

(4) 三個のリンゴ。 島山(2016:29)

(5) 一 本 书。

(一 冊 本)

「一冊の本」

(6) 三 个 苹果。

(三 個 リンゴ)

「三個のリンゴ」

本稿は日本語の助数詞と中国語の名量詞を対象とし、日本語の助数詞と中国語の名量詞を対照し、日本語の助数詞と中国語の名量詞の相違点を研究する。第3節では、日本語の助数詞と中国語の名量詞の定義を行う。第4節では、日本語の準助数詞・擬似助数詞と中国語の準名量詞・擬似名量詞の定義を定める。第5節では、日本語の助数詞と中国語の名量詞の下位分類について検討する。

2. 先行研究と問題点

田中(1988:435)では「日本語の助数詞は、一般に接尾辞である」と指摘している。益岡・田窪(1992:63)では助数辞(助数詞)を名詞性接尾辞に分類され、「数といっしょに用いられるもの」と定義した。庵(2000:389)では「数字の後ろに付けるものを「助数詞」と呼ぶ」と指摘している。飯田(1999:5)では広義助数詞を「数詞に直接付くことができるもの」と指摘している。

問題点として、日本語では、事物を数える際に、「三匹」の「匹」のように、数詞と離れて独立して用いられないことが多い。しかし、「二箱のリンゴ」の「箱」のような数詞と離れて独立して用いることも少なくない。東条(2014)では、容器を基準に量を測るものが助数詞であると指摘している。田中(1988)、益岡・田窪(1992)が指摘しているように、接尾辞であるかどうかを基準として、助数詞を判断するのは不十分であると考ええる。また、庵(2000)、飯田(1999)では、助数詞が数詞の後ろに付くという特徴を指示しているが、数詞の特徴が示していない。さらに、日本語の助数詞の定義は統語論上の分析が多いが、意味論上の分析がほとんどない。本稿は先行研究に踏まえて、統語論と意味論の二つの面から助数詞の定義を行う。

飯田(1999:7)では、広義の助数詞が以下のように分類される。

【表 1】 広義の助数詞の分類 (飯田(1999)の分類)

数詞に直接付くもの(広義の助数詞)		
単位を示さないもの		単位を示すもの
独立して用いることができないもの 例:「個」「本」「冊」等	独立して用いることができるもの 例:「世帯」「株」等	度量衡として用いるもの 例:「リットル」「グラム」「メートル」「年」「日」「秒」等

飯田(1999)では広義の助数詞が単位を示すものと単位を示さないものに分類する。さらに、単位を示さないものを独立性によって、独立して使えるものと独立して使えないものに分ける。

東条(2014)では名詞型助数詞¹に注目して、名詞型助数詞が容器型助数詞²と非容器型助数詞に分けられる。益岡・田窪(1992:34)では、助数辞(助数詞)が類別辞³と単位辞⁴に分けられる。単位辞がさらに時間、時刻、日付、金額、回数・倍数、順序に分けられる。

問題点として、助数詞の統語論上の定義が多いが、意味論上の定義がない。本稿は先行研究を踏まえて、統語論と意味論の二つの面から名量詞の定義を行う。

王鐘林(1979:15)では「名量詞は人、または事物の単位を表す語である」と述べている。黄伯榮(1990:16)では「名量詞は人と事物の計算単位を表す」と述べている。朱德熙(1995:60)では「数詞と結合した後、しばしば名詞の修飾語となり、事物の数量を表すので、まとめて名量詞と呼ぶ」と論じている。劉月華(1996:114)では「名量詞とは事物の数量単位を表す語である」と指摘している。馬真(2001:18)では「名量詞は事物を計る単位である」と論じている。黎錦熙(2007:96)によれば、量詞(名量詞)が数量を表す名詞であって、数詞の後ろに加えて、事物の計量単位として使われる。

問題点として、中国語の名量詞は意味論上の定義が多いが、統語論上の定義はほとんどない。本稿は先行研究を踏まえて、統語論と意味論の二つの面から名量詞の定義を行う。

¹ 東条(2014:16)では、「数詞と切り離して単独の名詞として用いられるもの」を名詞型助数詞と呼ぶ。

² 東条(2014:16)では、「容器となる名詞を基準に量を測る」ということを容器型助数詞と呼ぶ。

³ 東条(2014:16)では、「容器となる名詞を基準に量を測る」ということを容器型助数詞と呼ぶ。

⁴ 益岡・田窪(1992:34)では、「数に付いて、量、回数、時間等の様々な単位を表すもの」を単位辞と呼ぶ。

朱徳熙(1995:56)では、名量詞が以下のように分類される。

【表 2】 名量詞の分類 (朱徳熙(1995)の分類をもとに筆者が作成)

個体量詞	個体名詞はすべて特有の個体量詞を持っている。例：本(冊)、頭(頭)、顆(粒)等
集合量詞	セットになったり、まとまりを成したりしている事物に対して用いる。例：双(膳)、对(对)、系列(連)等
度量詞	度量衡の単位を表す量詞である。例：斤(斤)、升(リットル)、亩(畝)等
不定量量詞	常用の不定量量詞は“点儿” [少し(の量)] と“些” [少し(の量あるいは数)] の二つだけである。
臨時量詞	名詞を借りて量詞としたものである。例：碗(杯)、口袋(袋)、书架(本棚)等
仮性量詞	量詞の後に現れた時は名詞であり、数詞の後に直接現われたときは量詞であるとみなし、仮性量詞と呼ぶことにする。例：县(県)、站(駅)、世紀(世紀)等

朱徳熙(1995)では、名量詞が個体量詞、集合量詞、度量詞、不定量量詞、臨時量詞、仮性量詞という 6 種類に分けられる。

王希傑(1990:54)では、名量詞が以下のように分類される。

【表 3】 名量詞の分類 (王希傑(1990)の分類をもとに筆者が作成)

個体量詞	ある事物を表すものである。例：个(個)、頭(頭)、張(枚)等
度量衡量詞	ものの高さ、重量、容積を計算する単位である。例：尺(咫)、公斤(キログラム)、升(リットル)等
集合量詞	同類の事物の集合を表すものである。例：对(对)、双(膳)、套(セット)等
部分量詞	整体と集合の中心部分の事物を表すものである。例：些(少し)、点(少し)、滴(滴)等
容器量詞	容器量詞は名詞と量詞の両方の機能を持っている。容器名詞が事物の計算単位として使われる場合、容器名詞は量詞になる。例：箱(箱)、瓶(瓶)、碟(皿)等

王希傑(1990)では、名量詞が個体量詞、度量衡量詞、集合量詞、部分量詞、容器量詞という 5 種類に分けられる。

呂叔湘(1980:8)では、名量詞が以下のように分類される。

【表 4】名量詞の分類 (呂叔湘(1980)の分類をもとに筆者が作成)

個体量詞	根(本)、只(匹)、个(個)等
集合量詞	对(対)、双(膳)、捆(束)等
部分量詞	些(少し)、点儿(少し)、页(頁)等
容器量詞	车(車)、杯(杯)、瓶(瓶)等
臨時量詞	头(頭)、脸(顔)、地(一面)等
度量量詞	米(メートル)、斤(斤)、亩(畝)等
自主量詞	国(国)、省(県)、星期(週)等
複合量詞	人次(延べ人数)、吨公里(トンキロメートル)、秒立方米(立方メートル毎秒)等

呂叔湘(1980)では、名量詞が個体量詞、集合量詞、部分量詞、容器量詞、臨時量詞、度量量詞、自主量詞、複合量詞という 8 種類に分けられる。

問題点として、朱徳熙(1995)、王希傑(1990)、呂叔湘(1980)では“些”「少し」、「点儿」「少し」、「县」「県」、「国」「国」、「站」「駅」などが名量詞に分類されたが、しかし、「些」「少し」、「点儿」「少し」、「县」「県」、「国」「国」、「站」「駅」などは前に来る数詞の制限があるので、本稿は名量詞ではないと考える。本稿は名量詞の定義を行った上で、また名量詞の分類を検討する。

3. 日本語の助数詞と中国語の名量詞の定義

本節では統語論と意味論の二つの面から日本語の助数詞と中国語の名量詞の定義を行う。

3.1 日本語の助数詞の定義

まず、統語論上の定義を行う。

庵(2000:389)では「数字の後ろに付けるものを「助数詞」と呼ぶ」と指摘している。松本(1991:82)によれば、類別詞(助数詞)が数詞の後ろにつけられる。しかし、数詞の特徴を言及していない。田中(2012)、東条(2014)は数詞の特徴を検討した。田中(2012)では「任意の数詞と直結できる」と「数量詞を成して、副詞的位置へ生起する」という二つの面から助数詞を定義する。しかし、田中(2012)では基数詞⁵に付加するものだけに注目した。例文(7)(8)(9)が示すように、「冊」、「個」、「本」の前の数詞が自由に置き換えることができ、「冊」、「個」、「本」が基数詞と結合した後に副詞的な位置に生起できる。それに対して、例文(10)(11)(12)

⁵ 本稿では、数が増えれば数量も増える数詞を基数詞と呼ぶ。

が示すように、「番」、「位」、「号」の前の数詞も自由に置き換えることができるが、「番」、「位」、「号」が序数詞⁶と結合した後に副詞的な位置に生起できない。したがって、田中(2012)の定義の「数量詞(句)を成して、副詞的位置へ生起する」という条件は問題があると考えられる。

- (7) a. 四冊の本を買う。
b. 七冊の本を買う。
c. 本を七冊買う。
- (8) a. 二十二個の餃子を作った。
b. 五十個の餃子を作った。
c. 餃子を五十個作った。
- (9) a. 五本の傘を販売した。
b. 二十五本の傘を販売した。
c. 傘を二十五本販売した。
- (10) a. 三番の問題を読んでください。
b. 八番の問題を読んでください。
*c. 問題を八番読んでください。
- (11) a. 今回の試験で、学年十三位を取った。
b. 今回の試験で、学年百位を取った。
*c. 今回の試験で、学年を百位取った。
- (12) a. 新潟大学学則第一号の規定を訂正しました。
b. 新潟大学学則第十四号の規定を訂正しました。
*c. 新潟大学学則の規定を第十四号訂正しました。

東条(2014:27)では、「名詞の数を数えられるという「可付番性」は助数詞の本質である」と指摘している。可付番性とは前に来る数の制限がなく、疑問詞⁷「何(なん)」と一緒に生

⁶ 本稿では、数が増えても数量が増えない数詞を序数詞と呼ぶ。

⁷ 東条(2014)では「何(なん)」を不定量詞と呼んでいるが、本稿では疑問詞と呼ぶ。

起できるというものである。東条(2014)も基数詞だけに注目するが、例文(13)(14)(15)が指摘するように、可付番性は序数詞にも適用される。したがって、本稿は助数詞の統語論上の定義を以下のように示す。

助数詞の統語論上の定義：前に来る数詞の制限がなく、疑問詞「何(なん)」と一緒に生起できる。

- (13) a. 三番の問題を読んでください。
b. 五番の問題を読んでください。
c. 何番の問題を読みますか。
- (14) a. 新潟大学学則第一号の規定を訂正した。
b. 新潟大学学則第三号の規定を訂正した。
c. 新潟大学学則第何号の規定を訂正したか。
- (15) a. 今回の試験で、学年十三位を取った。
b. 今回の試験で、学年三位を取った。
c. 今回の試験で、学年何位を取ったか。

従来の研究は統語論の立場から日本語の助数詞の定義を行って、意味論上の定義をほとんど行っていない。以下は意味論の立場から、日本語の助数詞の定義を行う。

例文(16)(17)(18)が示すように、日本語では数詞だけで数量や、順番などの意味がはっきり表すことができず、助数詞を付ければ、物の数量、順番がはっきり表せる。

- (16)*a. 二のゴミ袋をお願いします。
b. 二枚のゴミ袋をお願いします。
c. 二袋のごみ袋をお願いします。
- (17)* a. 三の例文を読んでください。
b. 三番の例文を読んでください。
c. 三つの例文を読んでください。
- (18)*a. リンゴ二を買った。
b. リンゴ二個を買った。
c. リンゴ二箱を買った。

本稿は助数詞の意味論上の定義を以下のように示す。

助数詞の意味論上の定義：助数詞は数詞を助けて、数量または順序を表す語である。

3.2 中国語の名量詞の定義

中国語の名量詞は意味論上の定義が多い。劉月華(1996)、黄伯荣(1990)、馬真(2001)、王鐘林(1979)などは全部意味論の立場から名量詞を定義した。本稿は先行研究に沿って、名量詞の意味論上の定義を以下のように示す。

名量詞の意味論上の定義：人間・事物の数量単位を表す語である。

名量詞の意味論上の定義は多いが、統語論上の定義がほとんどない。朱徳熙(1995:60)では名量詞を定義する場合、「数詞と結合する」という統語的な特徴が触れたが、数詞の特徴を詳しく言及していない。本稿は2.3.1節で述べた「可付番性」を中国語にも適用する。中国語では「何(なん)」と対応できるのが“几”“幾”と“多少”「何」であるが、“几”“幾”で尋ねる数量の制限がある⁸ので、“多少”「何」で「何(なん)」と対訳する。中国語の可付番性とは名量詞の前に来る数詞の制限がなく、疑問詞“多少”「何」と一緒に生起できるというものである。

王鐘林(1979:15)では「名量詞は人或いは事物の単位を表す語である。それは常に名詞の前に付加して名詞との組み合わせを求める」を述べている。朱徳熙(1995:59)によると、「数詞が量詞(名量詞)を伴わずに名詞を直接修飾することはできない」というのは中国語の大きな規則である。従って、中国語では事物を数える場合、「数詞+名量詞+名詞」という規則を満たす。

以上述べたことをまとめ、本稿は名量詞の統語論上の定義を以下のように示す。

名量詞の統語論上の定義：

- ① 前に来る数詞の制限がなく、疑問詞“多少”「何」と一緒に生起できる。
- ② 事物を数える場合、「数詞+名量詞+名詞」という規則を満たす。

4. 日本語の準助数詞・擬似助数詞と中国語の準名量詞・擬似名量詞の対照

本節では日本語の準助数詞・擬似助数詞と中国語の準名量詞・擬似名量詞を定める。

⁸ 劉月華(1996:83)では「“几”“幾”と“多少”“何”はどちらも数量を尋ねるのに用いられるが、“几”“幾”は“一”から“十”までのある数字の代わりに用いられるが、“多少”“何”はどんな数字の代わりにもなり、数の大小を問わない」と指摘する。

4.1 日本語の準助数詞・擬似助数詞

(19) 吹奏楽団の一員

飯田(2004:330)

(20) 三銃士

(21) 七不思議

一般的に、日本語では人・事物を数える場合、数える対象が直接に数詞の後ろに繋がることができず、数詞の後ろに助数詞が必要である。しかし、一部分の名詞は数詞の直後につながれて、数量を表せる。例文(19)~(21)が示すように、数詞の直後に置かれて自体の数量を表し、前に来る数詞の制限があるものを**擬似助数詞**と呼ぶ。

(22) ことし、そのようなところが三大学できた。

成田(1990:4)

(23) 新潟大学の四選手は昨日の夜東京に到着した。

(24) 今回の展示会は五会場で開催する。

例文(22)(23)(24)が示すように、「大学」「選手」「会場」のような、数詞の直後に現れて、自体の数量を表し、且つ前に来る数詞の制限がないものを**準助数詞**と呼ぶ。

4.2 中国語の準名量詞・擬似名量詞

朱徳熙(1995:58)と呂叔湘(1980:8)では“些”「少し」と“点儿”「少し」が名量詞に分類された。武柏索(1995)では“地”「一面」と“嘴”「口」が名量詞として使われた。しかし、例文(25)(26)(27)(28)が示すように、“些”「少し」、「点儿」「少し」、「地」「一面」、「嘴」「口」の前に来る数詞の制限があって、「一」だけと連用できる。したがって、本稿は“些”「少し」、「点儿」「少し」、「地」「一面」、「嘴」「口」のようなものは名量詞ではないと考える。

本稿では“些”「少し」、「点儿」「少し」、「地」「一面」と“嘴”「口」などのような、前に来る数詞の制限があるものを**擬似名量詞**と呼ぶ。

(25) a. 杯子 里 有 一 些 水。

(グラス 中 ある 一 少し 水)

「グラスには水が少しある」

*b. 杯子 里 有 两 些 水。

(グラス 中 ある 両 少し 水)

「意図した意味：グラスには水が少しある」

(26) a. 我 吃 了 一 点 儿 水 果。

(私 食 べ る 了₁ 一 少 じ 果 物)

「私は果物を少し食べた」

*b. 我 吃 了 两 点 儿 水 果。

(私 食 べ る 了₁ 两 少 じ 果 物)

「意図した意味：私は果物を少し食べた」

(27) a. 他 含 着 满 满 的 一 口 饭 菜 ， 说 不 出 话 来 。

(彼 口 に 含 む い っ ぱ い 一 口 飯 お か ず 話 す NEG 出 る 話 来 る)

「彼は口いっぱい飯やおかずをほおぼり、話もできないくらいだ」

武柏索(1995:92)

*b. 他 含 着 满 满 的 两 口 饭 菜 ， 说 不 出 话 来 。

(彼 口 に 含 む い っ ぱ い 两 口 飯 お か ず 話 す NEG 出 る 話 来 る)

「意図した意味：彼は口いっぱい飯やおかずをほおぼり、話もできないくらいだ」

(28) a. 雨 后 ， 田 里 长 起 了 一 地 野 草 。

(雨 後 畑 中 生 え る 了₁ 一 一 面 野 草)

「雨が降った後、畑一面に野草が生えた」

武柏索(1995:497)

*b. 雨 后 ， 田 里 长 起 了 两 地 野 草 。

(雨 後 畑 中 生 え る 了₁ 两 一 面 野 草)

「意図した意味：雨が降った後、畑一面に野草が生えた」

中国語では、名詞を数える場合、名量詞は義務的に数詞と一緒に生起する。しかし、例文(29)(30)が示すように、名詞“字”「字」と“人”「人」は直接につくことができる。“字”「字」と“人”「人」の前に来る数詞が制限ない。本稿では“字”「字」と“人”「人」のような数詞の直後に繋がれて自体の数量を表し、且つ前に来る数詞の制限がないものを**準名量詞**と呼ぶ。

(29) a. 这 首 诗 共 二 十 字 。

(这 首 诗 全 部 二 十 字)

「この詩は全部で二十字だ」

b.这次 发表 我 写 了 一 百 字。
(今回 発表 私 書く 了, 百 字)
「今回の発表は私が百字を書きました」

(30) a.云南 漾濞 地震 已 造成 一 人 死亡, 六 人 受伤。
(雲南省 地名 地震 もう 引き起こす 一 人 死亡, 六 人 負傷する)
「雲南省漾濞の地震で一人が死亡、六人が負傷しました」
第一財經(<https://www.yicai.com/news/101058589.html>)

b.云南 漾濞 地震 已 造成 一 百 人 死亡, 一 百 人 受伤。
(雲南省 地名 地震 もう 引き起こす 百 人 死亡, 百 人 負傷する)
「雲南省漾濞の地震で百人が死亡、百人が負傷した」

5. 日本語の助数詞の下位分類と中国語の名量詞の下位分類の対照

本節では日本語の助数詞と中国語の名量詞の下位分類について検討する。その上で、日本語の助数詞と中国語の名量詞の相違点を明らかにする。

5.1 日本語の助数詞の下位分類

日本語の助数詞では順序を表すものと数量を表すもの両方がある。本稿は順序を表す助数詞を**順序助数詞**と呼び、数量を表す助数詞を**数量助数詞**と呼ぶ。まず、順序助数詞を検討してみる。

- (31) 左から二番目⁹のボタンを押してください。
(32) 今回の大会で三位を取った。
(33) 今年第五号の雑誌を持ってきてください。

例文(31)(32)(33)が示すように、数詞に付加して事物の順番を表すものを**順助詞**と呼ぶ。順序助数詞では順助詞だけではなく、例文(34)(35)(36)が示すように、日付・時刻を表すものもある。例文(34)(35)(36)の「日」、「時」、「分」のような日付・時刻を表す助数詞を**時点詞**と呼ぶ。

⁹ 本稿では「番」が助数詞であり、「目」は数量詞句の後ろに付加してその順番にあたることを指す接尾辞であると考え（「三人目」、「二個目」、「二枚目」などの例もある）。「二番のボタン」の意味は番号二が付いているボタンで、「二番目のボタン」は番号が付いてなく、話者は順番がどちらから始めるのかを示さなければならない。そのため、「二番目のボタン」という場合、前に「左から」などのような順番が始まることを示さなければならない。

- (34) 十月八日から授業が始まる。
- (35) 午後五時に成田空港に着いた。
- (36) 今は九時三十分分です。

次は数量助数詞を検討してみる。益岡・田窪(1992:34)では「数える対象の種類によって使い分けられる」ことが類別詞であると指摘した。例文(37)が示すように、助数詞「人」は人間を数える場合に用いる助数詞である。例文(38)が示すように、助数詞「頭」は大形の動物を数える場合よく使うものである。例文(39)が示すように、助数詞「台」は機械類・機器類を数える場合よく使うものである。

本稿は益岡・田窪(1992)に従って、「人」、「頭」、「台」のような数える対象の種類によって使い分けられる助数詞を**類別詞**と呼ぶ。

- (37) お客さんが三人来た。
- (38) 動物園には虎が五頭いる。
- (39) 学校はパソコンを五台購入した。

類別詞は単一の形を持つものを数える。それに対して、水やジャムなどの自体では明確な形がないものはよく容器で計る。計算の便利のために、単一の形や姿を持つものも容器で数えるものもある。例文(40)(41)(42)の「皿」、「箱」、「袋」のような、本来は容器で助数詞としても使えるものを**容器詞**と呼ぶ。

- (40) 一日五皿の野菜を食べます。
- (41) リンゴを三箱購入する。
- (42) 机には五袋のミカンがある。

人間がものを測るために基準となる量を規定するものを、本稿は**単位詞**と呼ぶ。異なる量に対して別の単位詞が必要である。本稿は単位を時間単位と度量衡単位二種類に分ける。例文(43)(44)(45)が示すように、時間の量を表す単位を**時間単位**と呼ぶ。

- (43) 私の一月の食費は三万円ぐらいだ。
- (44) 学校は二日間休んだ。
- (45) 私は日本に二年間住んでいた。

単位詞には時間単位以外に**度量衡単位**があると考えられる。例文(46)~(50)が示すように、よく使うのは長さ(距離)、重さ、面積、容積、体積を表す単位である。

- (46) そのテーブルは長さが二メートルです。
- (47) 鈴木さんは毎日牛肉を三キログラム食べる。
- (48) 私が住んでいるアパートは約三十平方メートルです。
- (49) 私は毎日水を二リットルぐらい飲む。
- (50) 先月ガスが三立方メートルしか使えない。

日本語の助数詞の下位分類を図 1 でまとめる。

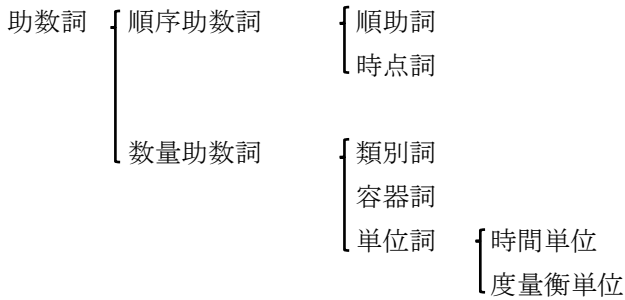


図 1 日本語の助数詞の下位分類

図 1 が示すように、日本語の助数詞には順序助数詞と数量助数詞の両方があり、順序助数詞には順助詞と時点詞の二種類が含まれ、数量助数詞には類別詞、容器詞、単位詞の三種類が含まれる。単位詞は時間単位、度量衡単位を含む。

5.2 中国語の名量詞の下位分類

劉月華(1996:114)では「個体的事物を表す名詞の前にはある特定の量詞を一つ置くものが要求され、勝手に用いることはできない。多くの個体量詞とそれらに対応する名詞の間には、何らかの意味的関連がある」と指摘している。即ち、中国語の名量詞も名詞の種類によって使い分けるものである。例文(51)の“只”「匹」は動物を数える場合に用いる名量詞である。例文(52)の“輛”「台」は車を数える場合に用いる名量詞である。例文(53)の“双”「足」は対をなして使うものを数える場合に用いるものである。本稿は“只”「匹」、「輛」「台」、「双」「足」のような数える対象の種類によって使い分けられる名量詞を**類別詞**と呼ぶ。

(51) 树 上 有 两 只 乌鸦。
(木 上 ある 兩 匹 カラス)
「木にはカラスが二匹いる」

(52) 路边 停 了 五 辆 出租车。
(路肩 止まる 了、 五 台 タクシー)
「路肩にタクシーが五台止まっている」

(53) 我 买 了 一 双 新 鞋。
(私 買う 了、 一 足 新しい 靴)
「私は新しい靴を一足買った」

中国語の名量詞も元々は容器で、名量詞としても使えるものがある。例文(54)(55)(56)の“车”「車」、 “瓶”「瓶」、 “袋”「袋」のような、もとが容器で名量詞としても使えるものを**容器詞**と呼ぶ。

(54) 今天 卖 了 五 车 苹果。
(今日 売る 了、 五 車 林檎)
「今日は車五台分の林檎を売った」

(55) 那 五个 客人 喝 了 五十 瓶 啤酒。
(その 五个 お客さん 飲む 了、 五十 本 ビール)
「そのお客さんらは五人でビールを五十本飲む」

(56) 今年 我们 公司 一共 出售 了 五万 袋 大米。
(今年 私たち 会社 ともに 販売 了、 五万 袋 お米)
「今年我が社はともにお米を五万袋販売した」

人間はものを測るために基準となる量を規定して、本稿は**単位詞**と呼ぶ。異なる量に対して別の単位詞が必要である。本稿は単位を時間単位と度量衡単位の二種類に分ける。時間の量を表す単位を時間単位と呼ぶ。例文(57)~(59)の“天(日間)”、“周(週間)”“年(年間)”のような、時間の単位を表す名量詞を**時間単位**と呼ぶ。

(57) 从 哈尔滨 到 广州 坐 火车 需要 两 天 时间。
(から 哈爾濱 まで 広州 乗る 列車 要る 兩 日間 時間)
「哈爾濱から広州まで列車で二日間が必要である」

(58) 我 用 了 两 周 时间 修改 这篇 发表。
(私 使う 了, 兩 週間 時間 書き直す この 発表)
「私は二週間をかけてこの発表を書き直した」

(59) 学 一 门 语言 最少 需要 三 年 时间。
(学ぶ 一 か 国語 少なくとも 要る 三 年間 時間)
「一か国語を学ぶのは少なくとも三年間が要る」

単位詞には時間単位以外は**度量衡単位**であると考え。例文(60)~(64)が示すように、よく使えるのは長さ(距離)、重さ、面積、容積、体積を表す単位である。

(60) 做 一 件 外套 需要 三 米 布。
(作る 一 着 コート 要る 三 メートル 布)
「一着のコートを作るために三メートルの布が必要だ」

(61) 他 能 吃 三 斤 牛肉。
(彼 できる 食べる 三 斤 牛肉)
「彼は三斤の牛肉を食べることができる」

(62) 这个 瓶子 可以 装 三 升 水。
(これ ボトル できる 入れる 三 リットル 水)
「このボトルは三リットルの水を入れることができる」

(63) 我 家 今年 种 了 五 亩 草莓。
(私 家 今年 栽培 了, 五 畝 莓)
「私の家は今年莓を五畝栽培した」

(64) 我 家 上个月 用 了 十三 立方米 天然气。
(私 家 前月 使う 了, 十三 立方メートル ガス)
「私の家は前月ガスが十三立方メートルを使った」

中国語の名量詞の下位分類を図2でまとめる。

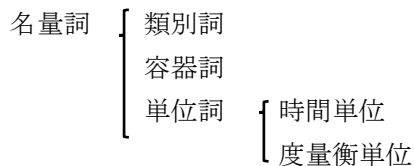


図2 中国語の名量詞の下位分類

図2が示すように、中国語の名量詞には類別詞、容器詞、単位詞の三種類がある。単位詞は時間単位と度量衡単位を含む。

5.3 日本語の助数詞の下位分類と中国語の名量詞の下位分類の対照

本節では日本語の助数詞と中国語の名量詞の分類を検討した。

日本語の助数詞の下位分類と中国語の名量詞の下位分類の相違点を図3でまとめる。

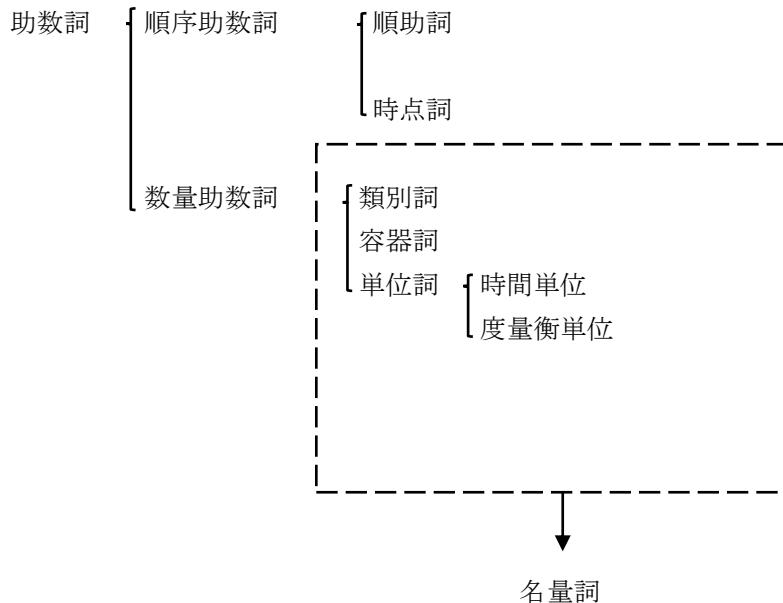


図3 日本語の助数詞の下位分類と中国語の名量詞の下位分類の対照

図3が示すように、日本語の助数詞の範囲は中国語の名量詞より広い。日本語の助数詞

には順序助数詞と数量助数詞の両方がある。一方で中国語の名量詞はただ量を表すもののみであり、順序を表すものがない。日本語の助数詞と中国語の名量詞には、類別詞、容器詞、単位詞(時間単位、度量衡単位)が共通して含まれる。順助詞と時点詞は日本語の助数詞にしか含まれない。

6. まとめ

本稿では、日本語の助数詞と中国語の名量詞を対照し、日本語の助数詞と中国語の名量詞の相違点を検討する。結論は以下の通りである。

第一に、統語論と意味論という二つの立場から、日本語の助数詞と中国語の名量詞の定義を行った。

日本語の助数詞の定義は以下のようである。

統語論上の定義：前に来る数詞の制限がなく、疑問詞「何(なん)」と一緒に生起できる。

意味論上の定義：助数詞は数詞を助けて、数量または順序を表す語である。

中国語の名量詞の定義は以下のようである。

統語論上の定義：前に来る数詞の制限がなく、疑問詞“多少”「何」と一緒に生起できる
さらに、事物を数える場合、「数詞+名量詞+名詞」という規則を満たす。

意味論上の定義：人間・事物の数量単位を表す語である。

第二に、日本語の準助数詞・擬似助数詞、中国語の準名量詞・擬似名量詞の定義を定めた。

擬似助数詞：数詞の直後に置かれて自体の数量を表し、且つ前に来る数詞の制限があるものである。

準助数詞：数詞の直後に置かれて自体の数量を表し、且つ前に来る数詞の制限がないものである。

擬似名量詞：数詞の直後に置かれて、且つ前に来る数詞の制限があるものである。

準名量詞：数詞の直後に置かれて自体の数量を表し、且つ前に来る数詞の制限がないものである。

第三に、日本語の助数詞と中国語の名量詞の下位分類について検討した上で、日本語の助数詞と中国語の名量詞の範囲を比較した。日本語の助数詞には順序助数詞と数量助数詞の両方がある。一方で、中国語の名量詞はただ量を表すもののみであり、順序を表すものがない。日本語の助数詞と中国語の名量詞には、類別詞、容器詞、単位詞(時間単位、度量衡単位)が共通して含まれる。順助詞と時点詞は日本語の助数詞にしか含まれない。したがって、本稿は日本語の助数詞の範囲は中国語の名量詞より広いと考える。

略語

NEG 否定

了: 完了助詞(動詞の後に置き、動作行為の完成或いは実現を表す)

参考文献

日本語で書かれた参考文献(五十音順)

- 安藤 貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.
- 飯田 朝子 (1999) 『日本語主要助数詞の意味と用法』 東京大学大学院博士論文.
- 飯田 朝子 (2004) 『数え方の辞典』 小学館.
- 庵 功雄・高梨 信乃・中西 久実子・山田 敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク.
- 周 知 (2022) 『日本語の助数詞と中国語の名量詞の対照研究』 新潟大学修士論文.
- 朱 徳熙 (1995) 『文法講義—朱徳熙教授の中国語文法要説—』 白帝社.(杉村博文・木村英樹訳)
- 田中 春美(編) (1988) 『現代言語学辞典』 成美堂.
- 田中 佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」 『筑波応用心理学研究』 19号,117-126.
- 東条 佳奈 (2014) 「名詞型助数詞の類型—助数詞・準助数詞・擬似助数詞—」 『日本語の研究』 4号,16-31.
- 成田 徹男 (1990) 「名詞と同形の助数詞」 『都大論究』 27号,1-8.
- 島山 雄二 (2016) 『徹底比較 日本語文法と英文法』 くろしお出版.
- 馬 真・郭 春貴 (2001) 『中国語ポイント100』 白帝社.
- 益岡 隆志・田窪 行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版.
- 松本 曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」 『言語研究』 99号,82-106.
- 武 柏索・王 淑文・周 国強(編) (1995) 『中国語量詞 500』 中華書店.
- 劉 月華・潘 文娛・故 韡 (1996) 『現代中国語文法総覧』 くろしお出版.(相原茂他訳)

中国語で書かれた参考文献(ピンイン順)

- 黄 伯榮・廖 序東 (1990) 『現代汉语(下)(現代漢語(下))』 高等教育出版社.
- 黎 錦熙 (2007) 『新著国語文法(新著国語文法)』 湖南教育出版社.
- 呂 叔湘 (1980) 『現代汉语八百词(現代漢語八百詞)』 商務印書館.
- 王 希傑 (1990) 『数詞・量詞・代詞(數詞・量詞・代詞)』 人民教育出版社.
- 王 鐘林 (1979) 『現代汉代语法(現代漢語文法)』 内蒙古人民出版社.